慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	森川洋著 中心地研究 : 理論, 研究動向および実証
Sub Title	H. Morikawa, Central places : theory, research trends and some empirical studies
Author	高橋, 潤二郎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1975
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.68, No.4 (1975. 4) ,p.405(103)- 407(105)
JaLC DOI	10.14991/001.19750401-0103
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19750401-0103

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

森川　洋 著

『中心地研究——理論，研究動向
および実証——』

（1）

「二十世紀前半における地理学における最も大きな理論的成果は何か」

いま，かりに現在の地理学者を対象にして，このような設問をもつアンケートをしたと考えてみよう。もちろん，さまざまな解答がかえってくるに相違ない。だが，その中で，かなりの数の研究者が，クリスターラーの中心地理論をあげるのではないかと思われる。1933年，Walter Christaller がその古典的名著「南ドイツにおける中心地」を刊行して以来，伝統的な地理学者からのさまざまな反撃にも拘らず，中心地理論は，地理学における数少ない理論の一つとして，既に確固たる地位を占めているように思われる。

いうまでもなく，中心地という概念そのものはクリスターラーのつくりだしたものである。だが，彼が「南ドイツの中心地」の中で展開した都市に関する視点およびその概念的枠組は，クリスターラー以前の研究者の論述の中にも見出だすことができるし，クリスターラー以後にも，多数の研究者があらわれ，彼の理論を修正・拡張してきた。現在みる中心地理論は，クリスターラーのみでなく，これら多数の研究者の貢献にもとづくものであり，いわば地理学共有の財産ともいうべき存在といえよう。この意味で，中心地研究は現在なおその流域を拡大しつつある一つのぼう大な水系にたとえることができるかも知れない。本書が何よりも注目されるのは，こうした広大な流域をもつ複雑な水系に関する我が国で最初にあらわれた本格的な「鳥瞰図」であるからに他ならない。

もとより，我が国に，これまでにも中心地に関する研究がなかったわけではない。前述のクリスターラーの著作についても，既に1959年江沢による邦訳が出版されており，また，最近では，石水がきわめて詳細かつ適格な紹介を行っており，さらに，中心地の実証的研究もまた多数発表されている。しかし，前述の水系という意味で，既存の中心地研究を，その源流にまでさかのぼり「それぞれの研究を評価し，研究史のなかに位置づけて説明した」仕事は，あきらかに我が国では（おそらく世界でも）はじめてのことであり，学界にとって大きな貢献をなし得たといえよう。

と同時に，注目すべきは，本書が既存の研究の単なるクリティカル・リビューに終わることなく，過去十数年にわたって，著者が行ってきたフィールド・ワークの研究成果をも収録していることであろう。これらフィールド・ワークは，中心地システムの形成と発展，中心地システムの構造，さらに，中心地やシステムと地域という3項目に大別され，熊本をはじめ岡山，広島など西南日本の諸県における中心地の調査結果から構成されているが，これらが，本書を単なる中心地研究の概説書以上の存在にしていることはいうまでもない。本書の前半をなす中心地の研究史は，こうした著者の調査研究，その方法論と諸技術の探究の過程から必然的に生まれたものであり，それが論評を一層説得的なものとしているように思われる。理論とフィールド・ワークとの絶望的な乖離，これがしばしば地理学研究に対して投げかけられた批判であり，地理学研究者自身の自己批判でもあったわけであるが，少なくとも，本書に関するかぎり，この批判はあたらない。単に，この意味だけでも，本書は戦後あらわれた地理学研究の中で第一級にランクされるものといえよう。

（2）

しかし乍ら，そうはいっても，いくつかの疑問がないわけではない。それらのうち，最も重要な疑問は，著者の問題意識に関するものである。果して，著者の関心は，本書において，中心地理論の展開とその経験的検証におかれているのか，或いは，中心地という概念とそれをめぐる諸概念からなる概念図式をもちいて「地域研究」を試みることにおかれているのであろうか，この点が，本書を通じて必ずしも明確にされていないことが，まず指摘されなければならないだろう。たしかに，著者は，中心地の研究史にふれた部分で，合衆国と大陸——特に西ドイツ——の研究者の間に，中心地研究の問題意識に相違のあることを指摘している。しかし乍ら，そのいずれの立場を支持するかについては，きわめて慎重にその解答を保留しているように思われる。

著者は，本書の中でクリスターラーに対するボベクの批判，

「地理学の研究に理論と実証，推論と観察の二面が必要であるが，ここで用いられた純粋理論を確

立する方法——理論の出発点とシェーマの計測にだけ経験的知識を用いる——および爾後の単なる現実における理論検証は，……地理学的立場から完全に満足しうるものかどうか明らかでない。私は，そのような方法で地理学的に重要な知識を前進させる可能性をとにかく否定しようとは思わないが，疑問を抱くものである……」

を引用し，これに対して，

「ペヴェンターをはじめ多くの経済学者がクリスターラーおよびレッシュの理論的欠陥を批判するのに対して，ボベクの理論検証に関する批判は当時の地理学者の立場を示すものとして興味深いものがある。」（傍点高橋）

とコメントをあたえているが，むしろ，このボベクの批判は現在でも有効であり，特に，著者にとっては，無視しがたい存在であったのではなかろうか。

この著者の問題意識のあいまいさは，さまざまな形で，本書の内容に影響をあたえている。もし，著者がはっきりと前者の立場をとったとしたならば，本書の前半を構成する中心地理論の検討ははるかに厳密性をましたに相違なく，クリスターラーやレッシュに対する著者の批判もはるかにきびしいものになったであろう。周知のように，クリスターラーの理論は，たしかに地理学に数少ない演繹的アプローチを明示的に採用した意味で重視すべきであるが，これを純粋な演繹体系としてみた場合，きわめて不十分なものであり，その定義，前提条件，さらにいくつかの結論（定理）が導出されるまでの論理的過程には，多くの欠陥が見出されるし，同様な欠陥は，レッシュの市場圏理論についてもいえるであろう。言い換えれば，現在われわれに要求されていることは，単にクリスターラーやレッシュの主張をそのまま紹介することではなく，むしろ，これらを厳格な「公理系」のもとに再構成することにあるわけであり，これを著者が試みようとしなかったことは，きわめて遺憾なことだといわなければならない。このことは，後半の実証部分についてもいえることであり，もし，著者が中心地理論の経験的検証を重視するという立場をとっていたならば，やはり，その内容はかなりちがっていたに相違ない。たとえば，著者は，「中心地システムの形成と発展」の中で熊本県における中心地システムの変化と大分県における中心地階層の変化とをきわめて詳細にあとづけているが，ここにおいて，クリスターラーの動学理論（仮説）の検証という問題意識は，きわめて稀薄であるように思われる。

周知のように，クリスターラーは，中心地の変化に影響する諸要因として，人口，人口構造と密度，中心財の供給，価格，種類，生産コスト，その他をあげているが，前述の熊本，大分2県に関する中心地の変化に関する論述において，著者はこれら要因について，ほとんど触れず，むしろ，歴史地理的な復元作業に終始しているように思われるからである。

勿論，研究者の問題意識は固定的なものではあり得ない。フィールド・ワークの積み重ねとともに，また，方法論に関する絶え間ない反省によって，次第に変化してゆくのはむしろ当然であろう。本書，特に後半をなすフィールド・ワークは，一部をのぞいて既に発表ずみの論文をもとに，これを再構成したものである。この点，著者はきわめて率直に次のように述べている。

「第2編の実証的研究をまとめるにあたっては，これまでに報告した原稿を読みかえし，修正し，要約する作業を行ったが，古い報告のなかには，その後の事例研究や新たな分析方法の開発によって大幅な修正を必要とするものが多い。これまで……書いたものを整理することは苦労の多い仕事であった。」

修正が分析技術に止まるならば，それはよい。しかし，もし，それが方法論にまでいたるものであったとしたら……。

（3）

しかし乍ら，こうした基本的疑問は別として，著者の展開する中心地の研究史は，前世紀初頭のミュラーの所説から最近（1969/70年）の各国の文献まで，きわめて広範囲にわたり，論評も適格である。このうち，特に注目すべきは，㈠「クリスターラー以前の中心地研究のめばえ」という項目をもうけ，従来あまり知られていなかった中心地理論の先蹤者を紹介したこと（ここで著者はボベクの業績を高く評価し，「今日中心地理論の創設者と評価されているクリスターラーのおもな貢献は，少し誇張していえば，この記述的なボベクの考えをさらに演繹的に深めて，六角形システムとして形を与えたことに限定されるべきであるとさえ思われる」と述べている）。㈡1950年代後半に中心地研究の変換点があるとし，クリスターラー以後の研究をこの時点で区分して紹介していること。さらに，著者の留学成果をとりいれて。㈢西ドイツ，オーストリアの最近の中心地研究についてか

なりの紙数をさいて紹介していることなどであろう。特に，第三点は，合衆国タイプの理論とその経験的検証というアプローチとはことなった，いわば伝統的な地理学のアプローチを色濃く残す研究を紹介したものであり，きわめて興味ある存在といえよう（ただ残念なことに，ここで，著者は，シェラーのそれを紹介した他，ほとんどこのアプローチに関する方法論的吟味を試みていない。もし，これがより周到に行われていたならば，おそらく，前述の疑問に対する解答は用意されたと思われる）。

勿論，こうはいっても，ドイツ以外の研究に言及されていないわけではなく，最近の合衆国の研究動向についても考察されていることはいうまでもない。特に，都市の順位—規模法則とクリスターラー理論との関係，中心地システムの変化に関する諸研究についての言及はきわめて質の高いリビューとなっている（だが，後者についてモリルの研究をはじめ一連の伝播過程に関する諸論文に関する言及がなされていないのは何故であろうか）。

他方，後半の著者自身のフィールド・ワークについても，とりあげるべき点はきわめて多い。前述のように，これらは，過去十数年にわたり，著者が発表してきた論文を圧縮したものであり，それだけに，読みごたえのあるものとなっている。この点，特に強調すべきは，著者の資料の吟味と，その処理に対する慎重な態度であろう。いうまでもなく，基礎データの収集とその処理，特に作図は地理学的なフィールド・ワークにおける出発点であるが，この点に関する著者の態度は既に定評のあるところであり，それが論述に一層の信頼性をあたえている。たとえば，「明治初期の都市分布」に添付されている1880年の我が国都市の分布と人口密度に関する2葉の作図(共武政表による)などは，これだけとってみても，我が国都市発展史を考察する上できわめて重視すべき資料となり得るものといえよう。

これらフィールド・ワークにおいて，著者が関心をもっているのは，いうまでもなく，中心地の階層区分とその空間的分布およびその勢力圏（補完地域）のありかた，そして，これらの変化過程である。このうち，中心地の階層区分に関して著者は県単位でこれを論じ，次いで，電話通話を指標にとって地方単位（九州），さらにこれを手がかりにして全国へと拡大してゆき，最終的に，我が国の中心地システムが東京を第一位として六階層からなることを主張しているが，むしろ，著者の中心地研究の本領は，こうした広域的な分析よりも県単位すなわち著者の分類にしたがえば，第4階層以下の中心地の分析にあると考えてよいだろう。特に，「岡山県における中心地システム」は著者がこれまで開発してきた諸技法を駆使したものであり，中心地という概念，或いは結節地域区分という問題意識のもとに行われた「地域研究」として出色のものである。

中心地の空間的分布に関して，著者は既にクリスターラー的な意味での幾何学的な規則性を見出すことを放棄しているように思われる（そして，これは適切な態度であろう）。したがって，著者の関心は，我が国の先駆的業績である渡辺良雄の福島県に関する研究と同様な意味での中心地（とその勢力圏）の分布パターンの地域差の発見に重点がおかれている。「シェーマ化した広島県の圏構造」は，こうした問題意識から導出された一つの結論であるが，今後，このシェーマを基礎にして「理論化」をはかることが著者に課せられた一つの課題ではなかろうか。同様なことは，中心地システムの変化を取扱った熊本，大分2県に関する事例研究にもいえるわけであり，ここにおける著者の主要なファインディイング，すなわち「低次中心地の衰退原因を高次中心地との競合淘汰によるばかりでなく，背後地農村における中心機能施設の充実にも帰することができる」という言明をクリスターラーの動態理論の中に位置づけるとともに，スキンナーその他から影響を受けたと思われる著者の中心地システムの「近代化」の概念を分析用具としてより強化することを通じて，著者独自の動態理論を構成してもらいたいと思うのである。

最後に，本書は一昨年から昨年にかけて，我が国出版界を襲った未曽有の状態の中で出版され，その結果，定価があまりにも高額になっている。一方において，きびしい出版事情にもかかわらず，このような研究書の刊行に努力された神戸氏の意欲と尽力をたたえるとともに，他方，可及的すみやかに本書がより多くの読者にも入手しうるような形で再刊されることを望みたい。〔昭和49年3月発行，大明堂，8,000円〕

高橋　潤二郎
（経済学部教授）